同時代ゲーム

大江健三郎

同時代ゲーム

大江健三郎

新潮社版

同時代ゲーム

●著者 大江健三郎 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 株式会社光邦 ●製本 新宿加藤製本 ●発行所 株式会社新潮社 東京都新宿区矢来町71番地
郵便番号 162 振替東京 4-808 番
電話 業務部 (03) 266-5111, 編集部 266-5411
昭和54年11月25日発行 昭和55年 1 月15日 4 刷
定価 1800 円

© Kenzaburô Ôe, Printed in Japan 1979
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

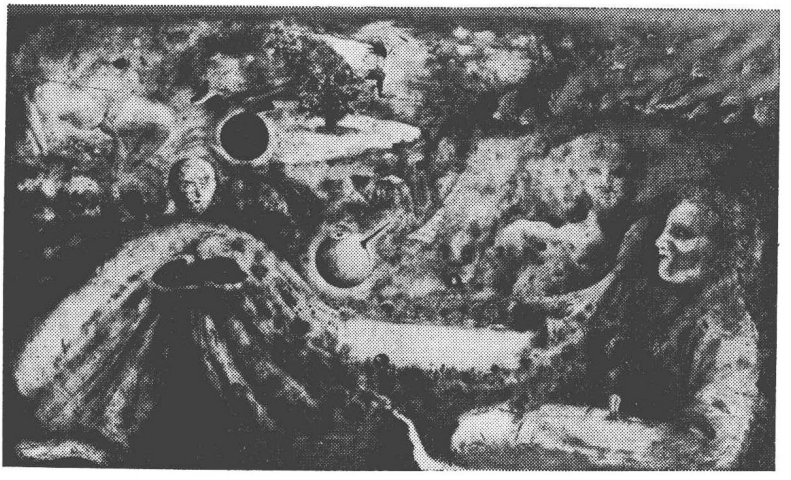
同時代ゲーム　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

第一の手紙　メキシコから、時のはじまりにむかって　7
第二の手紙　犬ほどの大きさのもの　93
第三の手紙　「牛鬼」および「暗がりの神」　177
第四の手紙　武勲赫々たる五十日戦争　247
第五の手紙　神話と歴史を書く者の一族　355
第六の手紙　村＝国家＝小宇宙の森　425

装幀・挿画　司修

同時代ゲーム



この小説の主要舞台である《村＝国家＝小宇宙》の、司修氏による空想図である。表紙カバーはこの図柄を反転したもの、本文中にカットとして使用したものは、その部分である。

第一の手紙　メキシコから、時のはじまりにむかって

1

妹よ、僕がものごころついてから、自分の生涯のうちいつかはそれを書きはじめるのだと、つねに考えてきた仕事。いったん書きはじめれば、ついに見出したその書き方により、迷わず書きつづけるにちがいないと信じながら、しかしこれまで書きはじめるのをためらってきた仕事。それを僕はいま、きみあての手紙として書こうとする。妹よ、きみがジーン・パンツをはいた上に赤シャツの裾を結んで腹をのぞかせ、広い額をむきだして笑っている写真、それにクリップでかさねた、きみの恥毛のカラー・スライド。メキシコ・シティのアパートの眼の前の板張りにそれをピンでとめ、炎のような恥毛の力に励しをもとめながら。

われわれの土地へ疎開してきた天体力学の専門家、アポ爺（ジー）、ペリ爺（ジー）の二人組が、その谷間と「在」を、壊す人と創建者たちの構想から、村であり国家であり小宇宙ですらあると読みとったこと。その思い出を、かれらとの別れにかさねて忘れえぬ僕は、まずかれらの指示にしたがって、われわれの土地をそう呼ぶことから始めよう。かつて村＝国家＝小宇宙には、ひとりの新しい子が誕生すれば、もうひとり嬰児の出産を待って対（つい）の二人をつくりだし、二人してひとつの戸籍に

登録する仕組があった。それは創建期につづいた「自由時代」と呼ばれる長い時期の後、表層としては村＝国家＝小宇宙が、大日本帝国に屈服してのちに、もうひとつ深い層での抵抗の仕組としてつくられたものであった。ところがその仕組も、百年たたぬうち村＝国家＝小宇宙が大日本帝国との間に戦った、五十日戦争の敗北により崩壊した。この仕組の構想の根本を支えた**壊す人**にも、それを立てなおすまでの力はなかった。

したがって五十日戦争後に生れた僕は、世間並に自分ひとりでひとつの戸籍をしめる者として、そのように現実世界を生きることになった。それでいて僕は小学校にもあがらぬ前から、**壊す人**の構想へと先祖帰りして、この世を生き死にするもうひとりの自分を見つけ出していたのだ。すなわち双子の妹であるきみを。もっともそれは僕ひとりの思いこみに立つのじゃなく、僕ときみとの名前のつけ方に、戸籍の二重制のカラクリにからむ、老人たちのたくらみがあったのだが。しかし双子とはいうものの、われわれが性を異にすることにおいて、**壊す人**の構想と僕らの対は離れていた。僕は**壊す人**の構想を学ぶことから、きみを自分の分身と考えるようになったのではなかった。きみをめぐって僕に自発した光が、**壊す人**の構想を歴史のなかに照しだしたのだ。

妹よ、いま僕があらためて、われわれの土地の神話と歴史を書く役割を再認識し、ついに仕事にとりかかることになったのは、マリナルコという小さな町で、分身たるきみに心底から呼びかけている自分を発見してのことだ。その時すでに僕はそれを手紙の形で書くのだと、それもきみの写真にかさねた、燃えあがる恥毛のカラー・スライドに励されながら書いてゆくのだと、思いきめていた。このように僕は直接きみにむけて書くが、それはついに**壊す人**の巫女（みこ）になったきみをつうじ、**壊す人**あてにもわれわれの土地の神話と歴史を書くのだと、僕が深く心を働かせていたことでもある。僕がこの発心にいたったマリナルコという町は、荒野にむけて迫った山巓（さんてん）の裾をわずかに拓いた、あらかた斜面の集落だが、メキシコの古い町の御多分に漏れず、そこに住ん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

できた人間の歴史は永く、かつ捩曲っている。そこでの一日の経験のうちに、僕は永い間その書き始めを時の前方へ押しやっていた、われわれの土地の神話と歴史を、それもきみにむけての手紙のかたちで、ただちに書こうとしている自分を見出した。もちろんのことに僕は、われわれの土地の神話と歴史を書く人間だということで、メキシコ・シティから車で疾走して四時間もかかるところへ招かれたのではなかった。そこで僕が自分の役割をあらためて引き受ける契機になった経験は、いかにも偶発的にやってきた。東独から亡命してアメリカ国籍を得た人間であり、フィリッピンとメキシコの交渉史を研究するうちに、日本語に関心をいだいて横道にそれ、かつまはマリナルコの混血（メスティソ）とインディオたちの集落に一戸を建てて暮している男から、ひとつの情報がつたえられた。そのアルフレート・ミュンツアーの情報こそが、契機のはじまりであったのだ。

――マリナルコのピラミッドを見るために日本人の団体客が来たのよ。スペイン語を話す日本人の添乗員が風変りな男でねえ、あのむこうの荒地を百ヘクタールほど、ほら山を焼いて煙が立っているあたりから、墓地が見える教会のあたりまで買いたいといいだしたよ。実際にその百ヘクタールがいくらで買えるか、知りたがったよ。なんのために？　長老に引率されたかれの郷里の人間が、新しい国をそこに造るために。以前その日本人は、国内で新しい土地を探していたが、いまはパック旅行の添乗員として、地球上くまなく探して歩く。日航が火星旅行を始めれば、それにも添乗員として乗りこんで、そこでの建国予定地を見分するといっていたよ。それこそがかれの郷里の共同体からあたえられた、子供時分からの役割なんだと。風変りな男ではあるが、私は、永い間笑っているだけではいられなかったよ。

そのようにいってアルフレート・ミュンツアーは、かれが日本語を話す際の、喉はフイゴのように鳴り鼻息は荒くなる苦しみから解き放たれると、むしろ悲しみをあらわして笑った。サボテンや老いた柳の貧しく生えている、石ころだらけの荒野のコヨーテのようにも、アー、アー、ア

ーと。

メキシコ高地の、さらに聳える山巓に囲まれて、かつては山越えするしか道のなかったマリナルコに、インディオの妻とともに住み、まわりの人びとに対し孤独な専横をきわめている亡命ドイツ人ミュンツアーがそのようにいった時、僕もまた本来居るべき場所から遠く引き離されてそこにいる、おぼつかない気分になった。そして深いもの思いに入りこんでしまったので、僕がその時立っていたか、腰をおろしていたか、それすらもいまぼんやりしている。あきらかなことはもうその時、右の第一臼歯を支える歯茎(はぐき)が痛みはじめていたことだ。いまあの経験の全体につき書こうとすると、マリナルコの大気、自然、事物、それも建造中を破壊された、山頂近くのピラミッドの巨大なレヴェルから、黒い岩の間の乾いた土に覗くサボテンの芽、そこに通う蟻の微細なレヴェルまでが、歯痛とともにいっせいに、アルフレートの言葉によって方向づけられる。

しかも僕はあの日マリナルコにいたった始めから、かれの言葉の喚起した経験のために、自分が準備されていたとも感じるのだ。永い坂を登りつづけて、深い峡谷の底に町並を、荒野への小さな岸として見おろすピラミッド遺跡で、アルフレートが、墓地のあるのとは別の、町なかにある教会を指さし、あれはなお建造中であったピラミッドの石材を、スペインの征服者にしたがって来た「牧師様」が運びおろさせて建てたのだと、自然な怨嗟をあらわしていった時、すでにそれは始っていた。僕は遙かに俯瞰する広場(ソカロ)正面の教会の、遠目にも粗悪な大理石と漆喰の格子模様から、われわれの土地の中心にある蠟倉庫を思いだしていたのだから。新しい建築の材料のために壊された、先住者の建造物という思い。石積みの囲いのなかのブーゲンビリアの、花盛りであるゆえにさらに暗い花叢(はなむら)に覆われた、スペイン瓦の重みのもとの低い家屋。そのアルフレートの家は、囲いの外側のインディオたちすべての民家とおなじく、癖のある梁材を生かした古い家屋だが、かれの敷地の場合、その石囲いの中にはもうひとつ、鉄筋コンクリートの箱にすぎぬが、

内装は日本建築を模倣した異様な建物もある。そのようにしてアルフレートは、町じゅうのインディオたちへ自己主張しているのだ。二つの建物に引き裂かれている中間の庭にはライムの高い樹があって、二種の小型トラックとジープが修理あるいは点検中であった。それらの車の間から、修理工見習いのインディオ青年ともども、頭をつき出したアルフレートの若い妻が、燃えるように眼を光らせ、逞ましい犬歯を下唇に突き刺すようにして微笑する。それが僕に、これはクェルナバカの宮殿壁画で見た、戦士インディオのピューマの仮面そのものだと感じとらせた。そして逆に僕は、メキシコ征服から革命にいたる全歴史をひとつの壁面に見る、そのような歴史の現前のさせ方から、妹よ、われわれの土地の神話と歴史のことを、懐かしいほど確実に考えめぐらしたのでもあった。すなわち僕は、この日マリナルコに入って以来、アルフレートがやがて伝えるはずの言葉の予感のもとにあったのだ。僕の精神と情動は、その土地から幾万キロをへだてた四国山脈のただなかの、われわれの土地において、外側の権力にいっぱい喰わせた者らにむけて動いていた。われわれの土地がいつまでも充分にその仕組を維持し、機能させつづけたとはいえぬのではあるが、いったん村＝国家＝小宇宙の衰亡の時にあたっては、未来のいかなる様態にも対応しうるよう、ジェット機で世界を飛びあるき、火星ツアーにも早ばやと乗りこもうとする偵察員を派遣している、そのような僕の根拠地へと、渇望の思いをこめて向っていたのだ。

そしてその予感の準備したものにアルフレートの言葉が火をつけると、僕はわれわれの土地が不断に発している電磁波に、胸のなかのカマキリのゼンマイのようなものを共振させて、そこから自分に託されている役割より他は考えなくなった。僕はその役割を自分にあたえている村＝国家＝小宇宙にむけて限りなく覚醒し、そのおかげでアルフレートのいる眼の前の世界にむけては失神したようであったのだ。そしてあらためてその変則的な気絶から眼をさましてみると、僕はさきに見下していた荒地に降りて、その起伏の高みのひとつに坐りこんでおり、脇には傷ついた

裸体のようなジープと、苛酷な気候に痛めつけられた柳の木があった。幾重にも裂けている乾いた柳の幹から、微細な風の音が起るのは、これも栄養不良のイグアナが僕の様子を見に出るのだ。僕の坐っている岩塊と痩せた土の斜面からはるかに下方、地の裂けめのように深い溝が開いているのは、雨期にそこを川が流れるのらしい。溝をへだてた向う側は灌木と草の原で、放牧した牛の五、六頭を、ライフルを肩にしたインディオが見張っている。その草原の背後はたちまち急勾配となる高い山。

その山の真下で、僕はここへ壊す人にひきいられたわれわれが植民する時、自分の役割としてはこの光景を明確に記録しうるのでなければならないと、妹よ、新たに考えていたのだ。大きく刳った椀の内側のように、急峻かつ長大な山腹。椀の底がひろがって行き、荒野になる、そのトバクチに腰をおろして見上げている僕。山腹の中ほどの赤松の疎林は朝鮮の文人画の光景と似ているのに、その上に展がるのはアルプスの高所の景観である。その不連続なものが連続した眺めは、緊迫した観察力をそそぐのでなければ、その全体を把握しがたいと思い知らせる。しかし妹よ、僕には自分を励す手がかりもあった。第一にはその山巓から荒野への眺めが、われわれの土地からの偵察員の、やはり生れながらの職務に立つ選択の感覚どおりに、新しい村＝国家＝小宇宙にふさわしいところがあると感じられたからだ。それはいわば内臓感覚において直覚されたのだし、第二にその内臓感覚を、ここへ来る途中に出会った、牧場を道と分つ有刺鉄線で腿の皮を切り裂きつつ跳びこえる牛の群のなかで、あわてふためいたジープのショックから大きいものになった歯痛こそが支えていたのでもあった。右の下顎の第一臼歯と、いまはその両側の歯までグラつき、それら三本の歯の根方が腫れて、前にせりだしている。そこで右頬は角ばって、ふだんの二倍にもなったようだ。一緒に荒野へ降りたラテン・アメリカ人の同僚たちが、いまは僕を拋りだすようにして、そこに湧き水のあることを示す溝の果ての、ユーカリの群生を見に行ったの

は、そのように苦しむ者の醜い顔つきを、かれらとして見るに耐えなかったからなのだ。かれらはみな、そのようなものを嫌悪するばかりか憤慨して立ち去り、ところがそのあげく湧水の匂いのする所で、いま同僚を置きざりにしたことに苦しんでいるはずの人格だから。

しかし僕には、妹よ、募りたてる歯痛とともに荒地に坐り、まことに多様な色あいとして山から荒地に降下する夕暮に眼をそそぎながら、充実感すらいだいていたのだ。当の歯痛が僕の内臓感覚を、われわれの土地ときみへむけて確かな紐帯(じゅうたい)で結んでいたから。われわれの双子としての、わずかな時間をおいての誕生以前に、男の子が生れれば、それが村＝国家＝小宇宙の神話と歴史を書く者だと父＝神主は予定していた。女の子なら**壊す人**の巫女にすると。それはおそらく事実なのだろう。妹よ、かつてきみはそれを信じていたようでなかったが、いまはきみこそもっとも固くその実現を信じているようだ、神話と歴史を書く者としての僕につき、また巫女としてのきみにつき。しかし僕として永らく考えてきたことをいえば、いったん生れて来た僕について、その仕事に適任かどうかということは、まず父＝神主の仔細な試験がおこなわれたはずだ。その結果、合格した僕は、村＝国家＝小宇宙の神話と歴史について父＝神主によるスパルタ式の学習に励んだ。そしてまたわれわれの土地から外に出て、歴史学の勉強にむかわねば、まともな仕事をすることはないだろうと、父＝神主が考えたことにより、東京の大学に学ぶことにもなった。そのつながりからついに僕は、本質においてはわれわれの土地の神話と歴史を書く者でありながら、現象的にはいまメキシコ・シティの大学に赴任している、そういう生き方をするにいたったのだ。すなわち僕は、われわれの土地で特殊に意味づけられたひとつの言葉、「文明人」となったのだった。谷間でも「在」でも、実際の役に立たぬ「文明人」が多くつくられてはならない。それはそもそもの創建者たちと、**壊す人**の意志に反するだろう。そうだろうじゃないか、妹よ？　それを考えてもなおさらに、年少の僕は父＝神主により注意深い試験を受けたはずだ。ところが奇妙

な話になるが、僕の歯痛こそが、誕生以前から期待された役割への資格を証明し、きみと僕とを、おたがいにちがった生き方をたどる二人へと分離したのだ。きみはわれわれの土地でもおよそ最上の歯をしていたが、少年時の僕は思い出すすべての日々、歯の痛みを自覚しなかったことがないほどだ。われわれの土地にはただひとりの歯科医しかいなかった以上、僕がかれを独占するわけにはゆかない。そこで僕は、自分自身で歯の治療をおこなうことにしていた。きみはそのような場面にしばしば立ち会っていたんだが、悲しげにまた面白げに黙って見つめていたきみにとって、妹よ、それは治療というよりもむしろ気まぐれな自損行為に見えただろう。僕がやったことは、歯にできた黒い穴を水成岩の砕片で掻き廻したり、腫れた歯茎を切り裂いたりしたにすぎぬから。その間にも歯の神経は、巨大ボルトの静電気を充電させるおもむきで、ついに僕はギャッと叫んで転倒した。それでもきみたちの見守る前、あらためて起きあがった僕は、さらに尖った砕片を探し、同じところにそいつを突っ込んだのだ。痛みが軽減されることはなく、頭から肩まで重苦しく熱を帯びてくるようだったのに、血とアブクを唇の周りに輪のようにつけ、固くつまんだ水成岩の切れっぱし同様に蒼ざめて。河原で同年輩の子供らの注視のもとにおこなわれたこの手術。それにつき、きみは訴える相手もないままに黙っていたわけだが、他の子供らは家々へと報告に走った。そのようにして、気狂いじみてはいるが狂気でなく、愚鈍でもない者としての印象が、僕についてかたちづくられた。もっとも妹よ、おしゃべりの僕に対比して、つねに黙りこんでいた幼女期のきみの内に、どのような評価がかたまっていたかはわからぬが。僕自身として、いったいあれはどういう意味の行為であったのか？　それは日夜ジリジリ僕を苛しめつづけた歯の痛みの、一挙の顕在化をおこなえば、そしてその歯痛が僕の存在を圧倒するほどのものとなれば、その時こそわれわれの土地を律する力が、すなわち**壊す人**の力が、乗り出して来ると思えたからだ。すでに自力ではなにをすることもできぬ、憐れなガキを救済するために。もちろん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com